

五 當にならぬ當

當にならぬものを當にしてはならぬ。當になるものを當にするがよい。さもなくば、當違を食つてとんだ目に、這々の體たらくだ。何が當にならぬか。動くもの、狂ふもの、弱いもの、變るもの、これである。動かぬもの狂はぬもの、強いもの、變らぬもの、これは當にしてよいのであります。世の中に果して眞に移り變らぬものがあるであらうか。「世の中は三日見ぬ間の櫻かな」。それも長くは續かぬ。「花の色は移りにけりな徒に、我身世に經るながめせし間に」。「花の春こんな親爺ぢやなかつたに」こんな時になつて、ぢたばた騒いだとて何にもなりはせぬ。

尤も中には、當にすまじきものを當にして、却つて大悟徹底せられたと云ふ、夢想國師の如きもありません。當がはづれた時顛倒覆つて驚愕する途端、眞實のものが得られる。併しこれは危険千萬だ。夢想國師が或時常州白庭の比佐居士の處においてになつて、或夜、眞暗い室で、座禪をしやうとせられ、後に壁があるとはかり思つて、ソツと身體を寄せらるゝなり、ズドンと仰向に倒れられた。實は後に何にもなかつたのである。がその刹那國師は豁然として大悟徹底せられた。

多年掘レ地覓ニ青天一

そへえたりぢうくのげえうぶつ
添得重々礙贖物

一夜暗中颯ニ碌輒一

はしなくげきさいすこくうのはね
無レ端擊碎虚空骨

と投機の偈をお讀みになつたと云ふことです。世人が急に無常に感ずるのも罪惡に戦くのも、こんな有様でせう。併し射的的的確かなものでなくてはならぬ。

如來救濟の時は何でありませうぞ。私供の慈悲善根が救濟の目的であらうか。否々、歡喜心も、懺悔心も、誠心も、すべて目印とはなさらぬ。然ら

ば何か。胸の中に山程積み蓄へた貪瞋煩惱である。これだけは間違ひなし、何時でも持合です。

誰しも自分の家を間違へるものはありますまい。知らぬ旅の宿なら、目印の必要がありませんが、我家にはそんなものは要りませぬ。獨り手に足が向いて来る。即ち家全體が目印なんです。それでも人によつては間違へぬでもない。佛國の有名な數學者アンベール氏は、餘り物に凝性の故か、物忘をするのも亦有名であつた。外出の際は來客の迷惑を思つて、必ず門口に「アンベール不在」の札をかけさせて置く。或日氏は外から歸り來て、門口を這入らうとする刹那、ふとその札を見付けて「アンベール不在。いや御主人は留守か、不在ならば致方がない、重ねて來ませう」と、そのまゝ何處へか行つてしまつたと云ふ。面白いではありませんか。

田舎から都見物に出て來た主従二人。朝、宿屋を出る時、主は從者に注意して、「都の家作りは、どれもこれも皆同じやうで、夕方歸つた時、泊る家が分らぬ様では困るから、何か目印に覺えて置け」と云へば、「ハイ畏まりました、ちやんと目印があります」と、其日は彼地此地を見物して、黄昏頃に歸つて見たが、案の如く泊つた家を見忘れて、一向分らず、主の男は腹を立つて「それだから今朝も能く目印をして置けと云ふたではないか、汝が乃公の云ふことを聞かないから分らなくなつた」と叱るに。「否え、目印をして置きました」。「どんな目印であつた」。「屋根の上に、鴉が三羽止つて居るのを目印にして置きましたが、其の鴉が見えませんが、それに戸口に寝てゐた犬まで居ませんもの、困りました」。

屋上の鴉や、戸口の犬は、その家の目印にはならぬ。その家の町名屋號でなくては甲斐もない。「凡夫のまことの心とおぼしきは、一念おこすに似たれ

ども、全く末とほらず」。水に描けるが如き此の誠を以て、救済の目標とせられたならば、如來様は遠くに失望遊ばしたであらうのに。「妄念はもとより凡夫の地體なり、妄念のほかに別に心はなきなり」。この地體なる妄念煩惱の動かぬ處に、目をつけて御成就下されたのが、彌陀の本願ゆゑ「本願あにあやまりあらんや」である。

如來は、凡夫の動かぬ地體の妄念目的に本願を建てられ、凡夫は建てられた本願名號を目的に仰信し歸依し安住するのである。實に本願や行者、行者や本願。凡夫を救ふことを外にして本願なく、救ひ給ふ本願を外にして信仰はない。「煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろずのこと皆もつて、それごと、たはごと、まことあることなきに、たゞ念佛のみぞまことに在します」。

す」。『歎異抄』